

< 翻 訳 >

## 叙事詩の宗教哲学 —Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXIX)<sup>1</sup>—

茂木 秀 淳 元信州大学教育学部

キーワード： ナーラーヤナ，ナーラダ，ナーガ，落ち穂拾い

[339 章]<sup>2</sup>(B.351 章, C.13740-13763, K.361 章) (ナーラーヤナ章 (19) 最高のブルシャ)

ブラフマー神は言った。

- (1) 息子よ、聞くがよい。なぜこのブルシャが、永遠であり、変化することなく、不滅にして、量りがたく、遍在すると言われるのかを。
- (2) そなたによっても、余によっても、あるいは他の者たちによっても、このブルシャは見ることはできない、最善の者よ。このブルシャは、グナを伴い、グナを離れた<sup>3</sup>一切者であり、知識によって見る事が可能であると伝えられている。
- (3) このブルシャは、身体をもたず、あらゆる身体に住む<sup>4</sup>。もろもろの身体の中に住みつつも、もろもろの行為によって汚されることはない。
- (4) このブルシャは、余の内的アートマンであり、そなたの内的アートマンである。そして、身体と呼ばれる一切の者の内的アートマンである。このブルシャは見者であり (sākṣibhūtaḥ)、誰にも、どこにおいても捉えられないのである。
- (5) (このブルシャは) あらゆるところに頭をもち、あらゆるところに腕をもち、あらゆるところに足・眼・鼻をもっていて、単独で好むままに自由にもろもろの田を (kṣetreṣu) 行くのである。
- (6) もろもろの田とは、もろもろの身体であり、もろもろの (田にまかれる) 種子は善行と悪行である<sup>5</sup>。ヨーガを本性とする彼は、それらを知っている。それゆえ知田者 (kṣetrajña) とされるのである。

<sup>1</sup>本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXVIII)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 13 号) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本号で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1902-2]: E.W.Hopkins, "Phrases of Time and Age in the Sanskrit Epic," JAOS 23, 1902, pp.350-357.
- Hopkins[1903-2]: E.W.Hopkins, "Limitation of Time by means of cases in the Epic," American Journal of Philology, 24-1, 1903, pp.1-24.
- Edgerton[1965]: Franklin Edgerton, The Beginnings of Indian Philosophy, London, 1965.
- 原 [1975]: 原 實 「tapas, dharma, puṇya. ( sukṛta)」『平川彰博士還暦記念論集 仏教における法の研究』春秋社 1975, pp.507-544.

<sup>2</sup>この章には、Edgerton の英訳がある。(Edgerton[1965], pp.333-334)

<sup>3</sup>P. saguṇo nirguṇo B.,K.: saguṇair nirguṇair Cn. saguṇaiḥ, buddhīndriyādisahitaiḥ / nirguṇaiḥ śamādihīnair mūḍhaiḥ / (saguṇaiḥ とは、認識器官などをもつ者たちによって、nirguṇaiḥ とは、寂靜などを欠いた愚かな者たちによって、という意味である)

<sup>4</sup>aśarīraḥ śarīreṣu sarveṣu nivasati Ca. asmadādayaḥ punar nijakarmārjitaśarīranityaśaktayaḥ / sa punaḥ sarvaśarīreṣu eka evāvyaḥataśaktiḥ / aśarīraṃ vāva santam priyāpriye na sprśataḥ iti śruteḥ / (我々などは、自分の行為によって獲得した身体に限定された力をもつ。しかしこのブルシャは、あらゆる身体において一つのみであり、(身体に) 妨げられない力をもっている。「身体なく存在する者に、好悪の二者は触れることはない」(Chānd.Up.8.12.1) と天啓聖典にある故)

<sup>5</sup>P. bijāni ca śubhāśubhe B.,K.: bijam cāpiśubhāśubham

- (7) 彼の去来は、いかなる生き物によっても<sup>6</sup> 知ることができない。サーンキヤとヨーガの方法 (vidhi) によって順次に、
- (8) このプルシャの道を余は思量するが、しかし彼の最高の道を余は知らぬ<sup>7</sup>。しかし知識に従って、この永遠のプルシャについて語るであろう。
- (9) 彼は唯一であり、大であることを (語るであろう)。実に<sup>8</sup>、彼は唯一のプルシャであると伝えられている。この唯一にして永遠の存在は、「偉大なプルシャ」という名称を (mahāpuruṣaśabdā) もっている。
- (10) 唯一者は、(祭) 火として、多様に灯される。唯一者は、太陽として、さまざまな熱の唯一の源である。唯一者は、風として、世界で多様に吹く<sup>9</sup>。唯一者は、大海として、もろもろの水の唯一の源である。唯一者であるプルシャは、グナを離れていても (このように) あらゆる姿をもつのである<sup>10</sup>。そのグナなきプルシャに (一切は) 入るのである。(韻律: Triṣṭubh<sup>11</sup>)
- (11) グナからなるすべてを捨て、善悪の行為を捨て、真実と虚偽の両者を捨てて、このようにして (人は) グナなき者となるのである<sup>12</sup>。
- (12) 思量しがたくとも、その (プルシャの) 四種の微細な状態を<sup>13</sup> 知って、注意深く振る舞う苦行者は<sup>14</sup>、支配者たるプルシャに至るであろう。
- (13) このように、このアートマン (プルシャ) を、ある賢者たちは最高のアートマンと考え、そして他の内我を考察する人々は<sup>15</sup>、単一のアートマンを考えるのである。
- (14) そのうち、最高のアートマンは永遠にグナなき存在と伝えられている。彼はまさにナーラーヤナと認識されるべきである。彼はまさに一切の本性であるプルシャであるから。彼はもろもろの (行為の) 結果によって汚れることはない。あたかも蓮の葉が水で汚れることがないかのごとくに。

<sup>6</sup>P. bhūteṣu kenacit B.,K.: bhūteṣu kenacit

<sup>7</sup>na gatim vedmi cottamām Cf.Hopkins[Great Epic]: the Yogin's science, a bridge between the atheist and the devotee, however, occasionally repudiated by the God, p.189.12.

<sup>8</sup>P. hi B.,K.: ca

<sup>9</sup>bahudhā vāti Cs. bahudhā vāti, āvahappravahanivahasamvahādirūpeṇa / (bahudhā vāti とは、アーヴァハ、ブラヴァハ、ニヴァハ、サンヴァハなどの姿によって (多様に吹くの) である)

<sup>10</sup>nirguṇo viśvarūpa Cn. nirguṇo 'pi māyayā viśvarūpo bhavati / (nirguṇo 'pi グナを離れていても、幻力によってあらゆる姿となるのである)

<sup>11</sup>a 句: 12 音節 (Indravamśā), b,c 句: Vātormī, d 句: ほぼ Upajāti (第 7 音節が長音), e 句: 12 音節 ほぼ Vaiśvadevī (第 1 音節, 第 2 音節が短音), f 句: ほぼ Vātormī (第 4 音節が短音)

<sup>12</sup>ubhe satyānṛte tyaktvā evaṃ bhavati nirguṇaḥ Cp. satyaṃ, kāraṇam, kāryāpekṣayā / anṛtaṃ, kāryam, kāraṇāpekṣayā / (satyam とは、結果を期待するので、原因である。anṛtaṃ とは、原因を期待するので、結果である) Sandhi irregular: tyaktvā evaṃ Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of *praśliṣṭa-sandhi*, 1.1.2.4 -a/ā e-, p.12.12.

<sup>13</sup>bhāvasūkṣmaṃ catuṣṭayam Cn. aniruddhapradymnasamkarṣaṇavāsudevāparaparyāyam adhidaiṣam, virāṣṭrāntaryāmiśuddhabrahmarūpam adhyātmaṃ, viśvataijasaprajñaturīyasaṃjñam avasthācatuṣṭayam / ((四種とは) 侵入我, 光明我, 智慧我, 第四位と名づけられる四種の状態であるが、神格に関しては、アニルツダ、ブラドコムナ、サンカルシャナ、ヴァースデーヴァがもう一つの同意語であり、個体に関しては、光輝者、経系我、内制者、純粹者シュツダというブラフマンの姿である) Cs. avyaktam, mahān ahaṃkāro bhūtatanmātrapañcakaṃ ca sūkṣmacatuṣṭayam / (未顕現, 大, 自我意識, 五種の元素の唯が, sūkṣmacatuṣṭayam である) Cv. vāsudevāsamkarṣaṇapradymnāniruddhākhyam rūpacatuṣṭayam / (ヴァースデーヴァ, サンカルシャナ, ブラドコムナ, アニルツダと言われる四種の姿である)

<sup>14</sup>P. vicared yo yatir yattaḥ B.,K.: vicared yo 'samunnaddhaḥ

<sup>15</sup>P.,K.: apare 'dhyātmacintakāḥ B. apare jñānacintakāḥ

- (15) しかし他方のアートマンは、行為を本性とし、もろもろの解脱と束縛（の行為）と結びついている。また十七からなる集団とも<sup>16</sup> 結びついている。このようにプルシャは多種あることが、そなたに順序に従って語られた<sup>17</sup>。
- (16) （最高のアートマンは）世界の秩序の完全で最高の住居であると知るべきである。認識者であると同時に認識対象であり、思考者であると同時に思考の対象であり、食べる者であると同時に食べられる対象であり、嗅覚者であると同時に嗅覚の対象であり、触れる者であると同時に接触の対象である。（韻律: Śālinī<sup>18</sup>）
- (17) （最高のアートマンは）見る者であると同時に見る対象であり、聞く者であると同時に聞く対象であり、認識する者であると同時に認識の対象であり、グナをもつと同時にグナを離れ、グナの均一な第一原因と言われるものであり<sup>19</sup>、恒常永遠にして不変である。（韻律: Triṣṭubh<sup>20</sup>）
- (18) 創造者の最初の蔵を<sup>21</sup> 創造した者を、バラモンたちはアニルツダと呼ぶ<sup>22</sup>。この世界で、ヴェーダに説かれ、願望と結びついたよき行為は<sup>23</sup>、彼が享受すべきものである。（韻律: Śālinī<sup>24</sup>）
- (19) あらゆる神々、そしてよく心を制御した聖者たちは、もろもろの祭式によって（?prāgyajñair）まず最初に彼（アニルツダ）に祭式の取り分を捧げるのである<sup>25</sup>。ブラフマー神たる余は、生き物たちの最初の支配者として<sup>26</sup>、彼（アニルツダ）から生まれた。そなたは余から生まれたのである。そして動くもの・動かぬもの世界、そしてすべてのヴェーダは、秘密の教えと共に、余から生まれたのである、愛児よ。（韻律: Śālinī<sup>27</sup>）
- (20) そのプルシャは四つに分かれ<sup>28</sup>、望むがままに遊び戯れるのである。このようにこの至尊者は、（自らの）知識によって目覚めるのである<sup>29</sup>。
- (21) 以上のように、質問するそなたに、サーンキヤの知識において、そしてヨーガにおいて、適切に述べられていることを、愛児よ、（余は）適切に説明した。

<sup>16</sup>sasaptadaśakenāpi rāśinā Cn.,p.: saptadaśakena rāśinā, liṅgaśarīreṇa / (sasaptadaśakenāpi rāśinā とは、微細な身体と、という意味である) Cv. pañcabhūtamānubuddhyākhyasaptasahitena daśakena, indiryāṇām daśakena / (五元素、マナス、ブッディと呼ばれる七種を伴う十種、すなわち、十種の感官たちと、という意味である)

<sup>17</sup>Cf.Critical Notes: vv.14-15, Quoted, as an utterance of vyāsa, in the Śaṅkarabhāṣya on Brahma Sūtra 2.3.47 with the omission of 14cd, which seems to be a subsequent addition, p.2232(right), vv.14-15.

<sup>18</sup>b 句第 3 音節が長音であるべきところ短音になっている。

<sup>19</sup>P. yad vai proktaṃ guṇasāmyaṃ pradhānaṃ B.,K.: yad vai proktaṃ tāta samyakpradhānaṃ

<sup>20</sup>a 句: 12 音節 (第 6 音節の長音がなければŚālinī), b,c 句: Vātormī, d 句:Śālinī.

<sup>21</sup>P. ādyaṃ nidhānaṃ B.,K.: ādyaṃ vidhānaṃ

<sup>22</sup>viprāḥ pravadante 'niruddham Cn. viprāḥ, pūrṇajñānā brāhmanāḥ / aniruddham, ahaṃkārahyaṃ / (viprāḥとは、知識に溢れたバラモンたちは、という意味である。aniruddham とは、自我意識と呼ばれるものを、という意味である)

<sup>23</sup>vaidivaṃ karma sādhu āśīryuktaṃ Sandhi irregular: sādhu āśīryuktaṃ Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.3. Absence of *kṣaipra-sandhi*, 1.1.3.5. -u/ā a/ā, p.15.10.

<sup>24</sup>b 句第 5 音節が長音となるべきところ短音となっており、b 句全体が Vātormīとなっている。

<sup>25</sup>P. taṃ prāḡ yajñair yajñabhāgaṃ yajante B.,K.: taṃ prāḡvaṃṣe yajñabhāgaṃ bhajante

<sup>26</sup>ahaṃ brahmā ādya īśaḥ prajānām Sandhi irregular: brahmāādya Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.1. Absence of *savarṇa-sandhi*, 1.1.1.1. -a/ā a/ā, p.2.11.

<sup>27</sup>a,f 句第 5 音節が短音 (=Vātormī), c 句第 1, 第 3 音節が短音, e 句第 3 音節が短音。

<sup>28</sup>caturvibhaktaḥ Cn. caturdhā, vāsudevādirūpeṇa vibhaktaḥ, caturvibhaktaḥ / (caturvibhaktaḥとは、caturdhā, すなわち、ヴァースデーヴァなどの姿として、四種に、vibhaktaḥ 分かれる、という意味である)

<sup>29</sup>P. evaṃ sa eva bhagavān jñānena pratibodhitaḥ B. evaṃ sa bhagavān svena jñānena pratibodhitaḥ K. evaṃ sa bhagavān devaḥ svena jñānena bodhayat

[340 章] (B.352 章, C.13764-13774, K.362 章) (ナーラダの伝えるバラモン (1) 話の導入)

ユディシュティラは言った<sup>30</sup>。

- (1) 解脱の教義に基いたもろもろの吉祥なるダルマが、祖父によって述べられました。あなたは、生活期に生きる者たちにとっての優れたダルマについて私にお話し下さい。(Cf.MBh.XII.168.1)

ビーシュマは言った。

- (2) あらゆるところに<sup>31</sup>定められた聖なるダルマは、真実の果報を引き起こすものである<sup>32</sup>。ダルマは多くの門をもっているのです、果報をもたらない行為はこの世にはない。(Cf.MBh.XII.168.2)
- (3) 何らかの領域において<sup>33</sup>確信に至る人は誰でも、ダルマのみを (tam eva) 認め、他のものを認めないのである、バ - ラタ族の優れた者よ。(Cf.MBh.XII.168.3)
- (4) そなたもまた、かつて神仙ナーラダによってインドラに対して語られた話を私から聞くがよい、虎のごとき人よ。
- (5) 王よ、完成者として、三界の者たちによって崇拜された神仙ナーラダは、何者にも妨げられない風のように、もろもろの世界を順番に廻った。
- (6) ある時、彼ナーラダは神々の王インドラの住居に至ったのである、偉大な弓の射手よ。そして偉大なインドラによって丁重にもてなされ、(インドラの)近くに座った。
- (7) ゆっくりと座ったナーラダにシャチーの夫(インドラ)は尋ねた。「梵仙よ、あなたは何か不思議をなことを見ませんでしたか、汚れなき方よ、
- (8) 梵仙よ、完成者たるあなたは、動くもの動かぬものを含む三界を、常に好奇心をもって、見物人のごとくに、廻っているのです<sup>34</sup>、
- (9) 神仙よ、あなたにとってこの世界で知らないことは何もありません。あなたが聞いたこと、経験したこと、あるいは見たことを私にお話し下さい。」
- (10) 語り手たちの中ですぐれたナーラダは、安楽に座っている神インドラのために、長大な話を語ったのである、王よ。
- (11) その話を、質問されたかのすぐれた再生族(ナーラダ)が彼(インドラ)に語ったのと同じ仕方、語った通りに語るのです、そなたも私の話を聞くがよい。

[341 章] (B.353 章, C.13775-13783, K.363 章) (ナーラダの伝えるバラモン (2) 賓客の訪問)

ビーシュマは言った。

<sup>30</sup>yudhiṣṭhira uvāca Ganguli: Indeed, Vaisampaya began by saying what follows. "Yudhishtira said,...., p.203.2; Most texts begin abruptly by saying — Yudhishtira said, etc. etc., p.203, fn.1.

<sup>31</sup>sarvata N. sarvatra āśrameṣu / (sarvatra とは、もろもろの生活期において、という意味である)

<sup>32</sup>P. dharmāḥ svargyaḥ satyaphalodayaḥ B. dharmāḥ svargaḥ satyaphalam mahat K. dharmāḥ satyaḥ satyaphalodayaḥ

<sup>33</sup>P. yasmin yasmimṣ tu viṣaye B.,K.: yasmin yasmimṣ ca viṣaye P.(MBh.XII.168.3) yasmin yasmimṣ tu vinaye

<sup>34</sup>P. yathā tvam api B. yadā tvam api K. dṛṣṭam eva hi

- (1) クル族のすぐれた者よ、かつてガンジス川の右岸にあるマハーパドマというよき町に、禅定に集中した一人のバラモンがいた。
- (2) 冷静な (saumya) 彼は、アトリの子孫で、ヴェーダにおいて道を極め、疑念を断ち<sup>35</sup>、ダルマを常とし、怒りを克服し、常に満足し、感官を制御し、
- (3) 不殺生を喜び、常に誠実で<sup>36</sup>、よき人々によって敬われ、適切に獲得した財産とよき人柄をそなえ、
- (4) 知人と親戚を多くもち、友人や依頼人に敬われ<sup>37</sup>、よく知られた大きな家族の中で、すぐれた振る舞いを行っていた。
- (5) 彼は、多くの息子たちを見つつ (dr̥ṣṭvā)、大祭儀を行い、家法を守り、王よ、ダルマにかなった行為に専念していた。
- (6) そして彼は、ヴェーダに述べられたダルマ、正しく聖典に述べられたダルマ、そして学識ある人の行うダルマという三種のダルマを注意深く考えて、
- (7) 「善行をすれば私には何があるのだろうか。寛容とは何か<sup>38</sup>。最終目標とは何か」と、いつもこのように悩み、決断には至らなかった。
- (8) 彼がこのように悩んでいると、ある時、賓客がやってきた。それは最高のダルマを行い、心集中したバラモンであった。
- (9) 彼はそのバラモンを (歓待の) 行為にかなった仕方<sup>39</sup> 丁重にもてなした。そして疲れて座っている賓客に、次のような言葉を語った。

[342 章] (B.354 章, C.13784-13799, K.364 章) (ナーラダの伝えるバラモン (3) バラモン質問と賓客の返答; 天界への多様な道)

バラモンは言った。

- (1) あなたの言葉の甘美さによって、(あなたに) お話したいことが私に生じました<sup>40</sup>、罪なき方よ。今やあなたは私の友人です<sup>41</sup>。私が少しばかり話すことをお聞き下さい。
- (2) すぐれたバラモンよ、私は、家長期のダルマを息子に渡した後に、最高のダルマを行いたいのです。それにはいかなる道があるでしょうか、再生族よ。

<sup>35</sup>P.,B.: somānvaye vede gatādhvā chinnaśaṃśayaḥ K. somānvaye jāto jītāmā gotrato bhṛguḥ quad N. somānvaye, atrigotre / (somānvaye とは、アトリの家系に、という意味である)

<sup>36</sup>P. ahiṃsānirato nityaṃ satyaḥ B.,K.: tapaḥsvādhyāyanirataḥ satyaḥ Cf.Matsubara[1994]: *ahiṃsā*, one of the most important teachings also in the Pāñcarātra, p.147, Reference No.38.

<sup>37</sup>P. mitrāpāśrayasaṃmate B. sattvādyāśrayasaṃmite K. putrapautrapatiṣṭhite

<sup>38</sup>P. kiṃ kṣamaṃ B.,K.: kiṃ kṛtaṃ

<sup>39</sup>kriyāyuktena hetunā Cs. kiryāyuktena hetunā, karmitvena kāraṇena / (宗教的行為を行う者としての方法によって、という意味である)

<sup>40</sup>P.,B.: samutpannābhidhāno 'smi K. samutpanne vidhāne 'smin Ca. samutpannābhidhānaḥ, samutpannavivakṣaḥ / (samutpannābhidhānaḥとは、語りたいたことが生じた、という意味である) Cs. tvadāreṇa sārthakanāmāsmi / ((samutpannābhidhāno 'smiとは) 私は、あなたを尊敬するにふさわしい言葉 (?) をもつものです、という意味である) Critical Notes: 'with a tie [of friendship] being born within me, P. vol.16, p.2232(right), 342, v.1.

<sup>41</sup>P. mitratām abhipannas tvam B. mitratvam abhipannas tvam K. mitratvam samabhipannaḥ

- (3) 私は、単独で自分にとどまり、自分をアートマンに住む者とするを<sup>42</sup> 望み、(家長期と) 共通するもろもろの性質によって (guṇaiḥ) 縛られるのを望みません<sup>43</sup>。
- (4) 息子という果報に頼る若さが過ぎ去らない間に<sup>44</sup>、彼方の世界への糧食 (pātheyam) を得たいと願っています。
- (5) この世界の流れの中で<sup>45</sup>、彼方の岸に到達するのを望んでいる私に、ダルマからなる船は<sup>46</sup> どこにあるのか、という思い (mati) が生じました。
- (6) この世で、よき人々が集められたり連れ去られたりするのを見ると<sup>47</sup>、また、心定まらぬ人々の上に死神ヤマの旗の輪を<sup>48</sup> 見ると、(韻律: Upajāti<sup>49</sup>)
- (7) また、苦行者たちが食事の時に他人のところで (食物を) 求めているのを見ると、私の心は喜ばないのです。それゆえ、客人よ、あなたは英知の力 (buddhibala) に基づいて、ダルマの意味の真実に私を結びつけて下さい<sup>50</sup>。(韻律: Upajāti<sup>51</sup>)

ビーシュマは言った。

- (8) そこで英知ある賓客は、ダルマを希求する<sup>52</sup> 彼の言葉を聞いて、心地よい声で、穏やかな言葉を語った。
- (9) 私もまたこの点について迷っています<sup>53</sup>。それは私の望む所でもあります。天界には多くの門がありますので、私も確信に至っておりません。
- (10) ある人々は解脱を讃えます。ある再生族たちは祭式の果報を讃えます。ある人々は林住期を<sup>54</sup> 讃え、家長期を抛り所とする人々もいます。

<sup>42</sup>P. aham ātmānam ātmastham eka evātmani sthitaḥ B.,K.: aham ātmānam āsthāya eka evātmani sthitim (K. sthitam) Ca. ātmastham, ātmani sthitaḥ, svatantram / (ātmastham とは、アートマンの中に存在することを、すなわち、独立を、という意味である) Cs. ātmatvena sthitam / ((ātmastham とは) アートマンとして存在する、という意味である) Cn. ātmani sthitam, ātmajñānārtham ekākitayā sthātum, sanyāsam kartum, icchāmi / (ātmani sthitam とは、アートマンの認識のために単独であることを、すなわち、遊行することを、私は望む、という意味である)

<sup>43</sup>P.,B.: kartum kankṣāmi necchāmi baddhaḥ sādharmaṇair guṇaiḥ K. draṣṭum icchan na paśyāmi baddhaḥ sādharmaṇair guṇaiḥ Cn. guṇaiḥ, viśayapāśaiḥ / (guṇaiḥとは、もろもろの対象という畏によって、という意味である) Cs. sarvaprāṇīsādharmaṇair aśanāpipāsādibhiḥ / ((sādharmaṇair guṇaiḥとは) すべての人に共通する食欲、渇きなどによって、という意味である)

<sup>44</sup>P. yāvad evānatītam B.,K.: yāvad etad atītam

<sup>45</sup>P. lokasamtāne B.,K.: lokasambhāre

<sup>46</sup>dharmamayaḥ plavaḥ Cn. dharmamayaḥ plavaḥ, saṃsārābdhitarāṣāsādhanam / (dharmamayaḥ plavaḥとは、輪廻の海をわたる手段は、という意味である)

<sup>47</sup>samuhyamānāni (B.,K.: saṃyujyamānāni) niśāmya (K. niśāmya) loke niryātyamānāni ca sāttvikāni / Cp. sāttvikāny api prāṇijātāni loke niryātyamānāni, pīdyamānāni, samuhyamānāni, karmasrotasā cālyamānāni / (sāttvikāni, すなわち、生き物より生まれた者たちもまた、loke この世で、niryātyamānāni, すなわち、苦しみつつ、samuhyamānāni, すなわち、行為の流れによって運ばれていく、という意味である) Cs. sāttvikaphalāni / ((sāttvikāni とは) よき果報をもつ人々を、という意味である)

<sup>48</sup>dharmadhvajaketumālām Ca. dharmadhvajāḥ, yamaḥ, tasya ketumālām, prajāsamūham / (dharmadhvajāḥとは、ヤマであり、その ketumālām とは、生き物の集合を、という意味である) Cn. ketavaḥ patākā rogādayaḥ / (ketavaḥとは、病気などというもろもろの旗である) Cs. dharmā eva dhvajāḥ, tasya ketuḥ prakāśakaḥ, tanmālā, dharmaphalāni / ((dharmadhvajāḥとは) ダルマこそが旗であり、その ketuḥとは、輝かせるものであり、その mālā とは、もろもろのダルマの果報である)

<sup>49</sup>a,b,c 句: 中間休止の位置が第 6 音節の後にある。d 句の第 8 音節が、長音となるべきところ短音になっている。

<sup>50</sup>P. dharmārthatattve viniyukṣva mām tvam B.,K.: dharmeṇa dharme viniyukṣva mām tvam

<sup>51</sup>a,b,c 句の中間休止の位置が第 4 音節の後にあって、d 句の第 8 音節が短音。

<sup>52</sup>P. dharmābhilāṣiṇaḥ B.,K.: dharmābhībhāṣiṇaḥ

<sup>53</sup>B. はこの詩節の前に、atithir uvāca を挿入している。

<sup>54</sup>P. vānaprasthāśramam B.,K.: vānaprasthāśrayāḥ

- (11) ある人々は、王法が拠り所であり、ある人々は、自分の果報が拠り所であり、ある人々は、師匠の行為が拠り所であり<sup>55</sup>、ある人々は、(ヴェーダの)文章が拠り所であり<sup>56</sup>。
- (12) ある人々は、母と父に従順だったので天界に赴きました。他の人々は、不殺生によって、そしてまた別の人は、真実によって(天界に赴きました)。
- (13) 戦いに向かった人々は、実に殺されて天界に至りました。ある人々は、もろもろの落ち穂拾いの誓約によって完成者となり、天界への道に入りました。
- (14) ある人々は、ヴェーダ学習に集中し、ヴェーダの誓約に専念し、清浄にして英知をもち、自分に満足し、感官を制御して、天界に至りました。
- (15) 他の正直さを具えた人々は、不正直な人々によって殺されました<sup>57</sup>。しかし彼らは、正しく清浄な本性をもって、最高天に住んでいます。
- (16) このように世界には<sup>58</sup>多くの種類のダルマの門が開かれていますので、私の考えも揺らいでいます。あたかも風によって雲の縞(meghalekhā)が揺らぐかのようです。

[343章] (B.355章, C.13800-13810, K.365章) (ナーラダの伝えるバラモン(4)賓客によるナーガの紹介)  
賓客は言った。

- (1) バラモンよ、私は、我が師によって正しく語られた教えを、伝えられた通りに、あなたに話すでしょう。それを正しく<sup>59</sup>私からお聞き下さい。
- (2) かつての世界創造によって<sup>60</sup>ダルマの輪が転じた<sup>61</sup>ところ、ゴーマティー川の岸のナイミシヤの森に、ナーガという名の町がありました。
- (3) そこでは、再生族の雄牛よ、すべての三十柱の神々による祭式が行われました<sup>62</sup>。そこはまた、すぐれた王マーンダートリがインドラを征服した場所でもありました。
- (4) そこにダルマを本性とし、大幸運をもつ「パドマナーバ」(蓮華の臍をもつ者)という大蛇が住んでいます。それは「パドマ」(蓮華)としても知られています。

<sup>55</sup>P. gurucaryāśrayaṃ B. gurudharmāśrayaṃ K. gurudharmāśrayāḥ

<sup>56</sup>P. kecid vākyam yam āśrayam B. kecid vākṣaṃyamāśrayam K. kecid vākṣaṃyamāśrayāḥ

<sup>57</sup>nihatānārjavair janaiḥ Ca. nihatānārjavaiḥ, tyaktavakrabhāvaiḥ / (nihatānārjavaiḥとは、曲がった心を捨てた、という意味である) ここは、Oberliesの指摘に従い、double sandhiとみなして、nihatā anārjavair janaiḥと読むべきであろう。Ganguli (p.206.8), Deussen (p.865, v.15) もそのように解して訳している。Cf. Oberlies[Grammar]: 1.8. Double sandhi, p.43.14.

<sup>58</sup>P. loke B., K.: lokair

<sup>59</sup>P. arthataś tac ca B., K.: arthataśtvaṃ tu

<sup>60</sup>P. pūrvābhisargeṇa B., K.: pūrvābhisarge vai Critical Notes: 'according to the laws or requirements of an earlier Creation', P. vol.16, p.2233(left), 343, v.2.

<sup>61</sup>dharmacakraṃ pravartitam Cs. dharmacakraṃ, dharmasamūham / (dharmacakraṃとは、ダルマ全体が、という意味である)

<sup>62</sup>tridaśais tatra iṣṭam āsīd Sandhi irregular: tatra iṣṭam Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of praśliṣṭa-sandhi, 1.1.2.1. -a/ā i/ī, p.7.2.

- (5) 再生族の雄牛よ、その蛇は、言葉によって、行為によって、心によって、三種の道に立って<sup>63</sup>、生き物たちに恩恵を与えています。
- (6) 彼は、友好的手段によって、贈物によって、離間策によって<sup>64</sup>、武力によって、というように四種(の政策)を用いて(caturvidham)、悪しき者を支配し、熟慮によって自分の眼を守っています<sup>65</sup>。
- (7) 手順に従って彼に近づき、知りたいと願うことを尋ねるべきです。彼は最高のダルマを誤ることなくあなたに示すでしょう<sup>66</sup>。
- (8) なぜならかの蛇ナーガは、すべての人を客とし、悟りの典籍に通じ(buddhiśāstraviśāradah)、望ましい高貴な性格をすべて具えていますから。
- (9) 彼は、本性として水を常とし<sup>67</sup>、常にヴェーダ学習に喜び、苦行と(心の)制御を、そして高貴な振舞いを身につけています。
- (10) 彼は、敬虔で、布施を好み、忍耐強く、最高の振舞いを行い、真実の言葉を持ち、嫉妬なく、心がけよく、献身的で<sup>68</sup>、
- (11) 残った食べ物を食べ、その言葉は心地よく、大変に好意的で、正直であり、為したこと・為されぬことを知り、敵対せず、生類の幸福に心をむけ、ガンジス河の水のごとく(清らかな)(gaṅgāhradāmbhaḥ)高貴な家柄に生まれました。(韻律: Upajāti<sup>69</sup>)

[344章] (B.356章, C.13811-13821, K.366章) (ナーラダの伝えるパラモン(5) 賓客の話に対するパラモンの感動)

パラモンは言った。

- (1) あまりの重荷を背負った私の重荷を除き、最高の慰めとなる<sup>70</sup> この偉大な言葉をあなたから聞きました。
- (2) 道に疲れた者にとっての寝台のように、立つのに疲れた者にとっての床座のように、喉の渴いた者にとっての水のように、空腹に苦しむ者にとっての食事のように、

<sup>63</sup>trividhe vartmani sthitaḥ Cn. trividhe, karmajñānopāstyātmake / (trividhe とは、行為と知識と祭式(upāsti)を本質とする(道において)、という意味である) Cp. kāyikavācīkamānase / ((trividhe とは) 身体的、言語的、精神的な(行為の)道において、という意味である) Cs. traivargike trayivihite vā mārge / ((trividhe とは) 三種の目的に関する、あるいは三種のヴェーダに規定された道において、という意味である)

<sup>64</sup>P. dānena bhedena B.,K.: bhedena dānena

<sup>65</sup>P. viṣamasthṃ janam svam ca cakṣur dhyānena rakṣati B.,K.: viṣamasthṃ samasthṃ ca cakṣur dhyānena rakṣati Cs. cakṣur upalakṣitam indriyagrāmaṃ dhyānena viṣamadoṣajñānena rakṣati / (cakṣus, すなわち、(眼という語によって) 含意された感官の集団を、dhyānena, すなわち、悪しき欠点を知ることによって、rakṣati 守る、という意味である)

<sup>66</sup>namithyā darśayisyati Cf. Oberlies[Grammar]: 10.4. Excursus: Nominal composition, (c) na-compounds, p.359.8.

<sup>67</sup>prakṛtyā nityasalilo Ca. nityasalilo, nityajalakāryasānāncamanādirataḥ / (nityasalilaha とは、常に水の中で行う沐浴や濯ぎなどを喜び、という意味である) Cn. nityam salilavan nirmalaha nityasalilaha / (nityasalilaha とは、常に水のごとく汚れがない、という意味である) Cs. atisvacchahṛdayaḥ / ((nityasalilaha とは) 非常に澄んだ心をもっている、という意味である)

<sup>68</sup>P. abhisamśritaḥ B.,K.: niyatendriyaḥ

<sup>69</sup>c 句中中間休止の位置が第4音節の後になっている。

<sup>70</sup>parāśvāsakaram Cs. kākṣārthaprakāśakam / ((parāśvāsakaram とは) 知りたいと願っていた意味を明らかにする、という意味である)



- (3) 客にとって、適切な時に望ましい食事ができるように、また、長い間(子供を)望み年をとった者にとっての自分の子供のように、
- (4) 心中気にかけていた親愛の人との再会のように、あなたが発した言葉は私を喜ばせました。
- (5) 虚空に眼を向けた者が<sup>71</sup> 見るかのように、私はこの教えを仰ぎ見、そして熟慮しています。この教えは、英知の言葉によって、私に対して為されたのですから。私は確固として、あなたが私に語った通りに振る舞うでしょう。
- (6) 今夜はここで、私と共に過ごして下さい、聖者よ。あなたは、安楽に過ごして元気を回復し、夜明けにお発ち下さい。(今は)この聖なる太陽は、光弱まり、顔を下に向けていますから。

ビーシュマは言った。

- (7) そして、バラモンによって賓客としてのもてなしを受けた客は、その晩をそのバラモンと共に過ごしたのである、敵を殺す者よ。
- (8) 両者は、ダルマに関連したことをあれこれと<sup>72</sup> 話しつつ、一晩中、昼間のように<sup>73</sup>、楽しく過ごしたのである。
- (9) それから夜明けになると、その賓客は、自分の為すべきことを求めるそのバラモンによって、精一杯もてなされた (pūjitaḥ)。
- (10) その後、ダルマを知るそのバラモンは、ダルマについての確信をもって<sup>74</sup>、親戚の同意を得た上で、教えられた通りに、一つの確信を堅持して、適切な時に (kāle) 蛇の王の住居に向かったのである。(韻律: Vaṃśasthavila)

[345 章] (B.357 章, C.13822-13834, K.367 章) (ナーラダの伝えるバラモン (6) ナーガとの面会)

ビーシュマは言った。

- (1) 彼は、様々な森々やもろもろの沐浴場、もろもろの池を順に巡った後で、一人の聖者のところに来て来た。
- (2) そのバラモンは、賢者によって教えられた通り、ナーガについて、礼儀にかなった仕方での聖者に尋ねた。そして聞いた後、さらに歩みを進めた。
- (3) 目的を知る彼は、指示されたことに従ってナーガの住居に着いて、「申し、私は参りました (aham asmi)」と、呼びかけの語で飾られた言葉を言った。
- (4) すると彼の声を聞いて、ダルマに専念し夫に忠実な美しいナーガの妻は、そのバラモンに姿を見せた。

<sup>71</sup>P.,B.: dattacaṣur ivākāśe K. manaścaṣur ivākāśe

<sup>72</sup>P. tat tac ca dharmasamyuktaṃ B. caturthadharmasamyuktaṃ K. tattvaṃ ca dharmasamyuktaṃ

<sup>73</sup>divasopamā Ca. divasopamety anena jāgaravattvaṃ ubhayaḥ api vyañjitaṃ / (divasopamā というこの語によって、両者ともに目覚めていることが述べられている)

<sup>74</sup>P. kṛtadharmaniścayaḥ B.,K.: kṛtakarmaniścayaḥ

- (5) ダルマを抛り所とする彼女は、規定通りに礼拝をした。そして歓迎の挨拶をして近づき、「何をいたしましょう」と言った。

バラモンは言った。

- (6) 貴方の優しい言葉によって敬意を表され、私は安らぎを得ました。私は、かの最高の神ナーガに会いたいのです、高貴な方よ。
- (7) なぜならそれが最高の目的であり、それが私が望んだ果報ですから<sup>75</sup>。この目的のために私は、今日蛇神の住いにやって来たのです。

ナーガの妻は言った。

- (8) 高貴な方よ、その者は、一月の間<sup>76</sup>、太陽の車を引くために出かけました。十五日たてば、バラモンよ、間違いなく姿を見せるでしょう。
- (9) 私の夫の外出の原因を<sup>77</sup>このようにお知らせください。他に何をすべきか、私におっしゃって下さい。

バラモンは言った。

- (10) よき方よ、この(お会いする)決心をして私はここにやって来ました。私は、(ナーガが)戻るのを期待しつつ、女神よ、この大きな森に留まるでしょう。
- (11) (ナーガが)戻ったならば、私がここに来たことを必ず知らせて下さい。あなたは、私が訪問したことを、そして私の言葉を話して下さい。
- (12) 私はまた、(あなたに)言われた期間、制限された食事をとることを守りつつ、ここゴーマティー川の美しい砂州に留まりましょう。

ビーシュマは言った。

- (13) それからその賢者、雄牛のごときバラモンは、何度もナーガの妻に念を押しした後、川のその砂州に行ったのである。

[346章] (B.358章, C.13835-13847, K.368章) (ナーラダの伝えるバラモン(7)バラモンとナーガの親族との対話)

ビーシュマは言った。

- (1) そして、最勝の人よ、その敬虔なバラモンが食事をとらずに住んでいるので、彼ら蛇たちは心配した。

<sup>75</sup>P. etan me phalam īpsitam B.,K.: etan me paramēpsitam

<sup>76</sup>māsacārikaḥ Cs. ekaikaṃ māsam ekaikena nāgena ratha udyata iti māsacārikaḥ / (māsacārikaḥとは、それぞれの一ヶ月、それぞれ一匹の蛇によって、(太陽の)馬車は引かれる、という意味である) Cf.Hopkins[1902-2]: Unique (expression of time-relations) is māsacārika, "occupied for a month", p.350.21.

<sup>77</sup>P. vivāsakaraṇaṃ mama B.,K.: vivāsakaraṇaṃ tava Cn. vivāsakaraṇaṃ, pravāsakāraṇaṃ / (vivāsakaraṇaṃとは、家にいないことの原因を、という意味である)

- (2) そのナーガの親戚，兄弟，子供たちと妻は，みんな一緒になって，そのバラモンのところに行った。
- (3) 彼らは，離れた砂州で，そのバラモンが誓約を守り，食事をとらず，低唱に専念して座しているのを見た。
- (4) 彼ら親族たちは皆，バラモンのところにやって来て，繰り返し礼拝して，明瞭な歓迎の言葉を述べた。
- (5) 「苦行に富む方よ，あなたがここに来てから今日で六日めです<sup>78</sup>。ダルマを好む方よ，あなたは少しの食事も望まれません。
- (6) あなたは我々のところに来ました。私達もあなたのところにやって来ました。私たちはあなたを賓客としてもてなさねばなりません。私たちは皆家族の一員ですから<sup>79</sup>。
- (7) 最高の再生族よ，木の根，果物，木の葉，あるいは牛乳，ご飯を，あなたは食事のために食べなければなりません，バラモンよ。
- (8) あなたが食事をせずに，森に留まっているために，老若が皆困っています。(賓客歓迎の)ダルマが危うくなりますから<sup>80</sup>。
- (9) 私たちには，胎児殺しをする者も，王よ，道を外れた者も，あるいは，不正直な者さえおりません<sup>81</sup>。また，この家では，神・賓客・親族たちよりも先に食べる者もおりませんよ。

バラモンは言った。

- (10) あなたがたの教示に従って，八夜目になって<sup>82</sup> ナーガが戻った時に，私はこの食事をとりましょう<sup>83</sup>。
- (11) もし八夜が過ぎても蛇王が戻って来ないならば，その時には食事をとりましょう。この誓約は彼のためのものですから。
- (12) ご心配は無用です。おいでになった通りにお帰りください。あなたがたは，彼のための私の誓約を<sup>84</sup>，今このようにして止めるべきではありません。

ビーシュマは言った。

- (13) このように，これらの蛇たちは，バラモンによって退去させられて，目的を達成せずに，自分の住居に帰ったのである，雄牛のごとき人よ。

<sup>78</sup> *ṣaṣṭho hi divasas te 'dya prāptasyeha* Cf. Hopkins[1903-2]: the nominative with a dependent genitive, "it is to-day the sixth day (since) you got here ", p.1.23; Oberlies[Grammar]: 10.3.1. Syntax of cases: The nominative, used to express statements of (a) time, 'For this is the sixth day since I (? you) came here ...', p.307.3.

<sup>79</sup> P.,B.: *vayaṃ sarve kuṭumbinaḥ* K. *īpsitaṃ tava ṛddhimat* (sandhi irregular)

<sup>80</sup> P. *dharmasaṃkaṭāt* B.,K.: *dharmasaṃkarāt*

<sup>81</sup> P. *bhrūṇahā kaśid rājāpathyo 'nṛto 'pi vā* B. *bhrūṇahā kaścij jātāpadyanṛto 'pi vā* K. *bhrūṇahā kaścit pannageṣv iha vidyate*

<sup>82</sup> *dvir ūnaṃ daśarātram vai* Cs. *virūḍhaṃ daśarātrasya* (for *dvir ūnaṃ daśarātram*) / *daśarātrasaṃbandhitvena yathā virūḍham ankuritaṃ, tathāyam āhāraḥ kṛtaḥ bhukta ity arthaḥ* / (virūḍhaṃ daśarātrasya とは，十夜に関連するものとして，例えば，virūḍham、すなわち，木の芽が出るように，そのように，āhāraḥ 食事は，kṛtaḥ，すなわち，(私によって) 食べられる，という意味である)

<sup>83</sup> P. *mayā vṛtaḥ* B.,K.: *kṛto mayā*

<sup>84</sup> P. *tannimittaṃ vṛtaṃ mahyaṃ* B.,K.: *tannimittaṃ idaṃ sarvaṃ*

[347章] (B.359章, C.13848-13863, K.369章) (ナーラダの伝えるバラモン(8) ナーガの帰宅と妻との対話)

ビーシュマは言った。

- (1) そして多くの日が経ち、時が満ちると、蛇王は、仕事を終え、太陽神から許可を与えられて、自分の住いに戻って来た。
- (2) 妻は、足の清めなどのもろもろの手段 (gunaiḥ) をもって彼に近づいた。近くに来たそのよき妻に蛇王は尋ねた。
- (3) 「さて、よき妻よ、お前は、かつて私が言った規定に従って、私と同じように適切な仕方<sup>85</sup>、神と賓客の供養をしたかね。
- (4) 目的を達成することなく、女の知恵によって (strībuddhyā) 怠けなかったかね。私がいなかったために、美しい尻をもつ者よ、ダルマの境界から離れたのではないか。」

ナーガの妻は言った。

- (5) 弟子たちにとっては師匠への従順が、バラモンたちにとってはヴェーダへの専心が<sup>86</sup>、召使いたちにとっては主人の言葉が、王たちにとっては<sup>87</sup> 世界の保護が (為すべきことです)。
- (6) この世では、クシャトリヤのダルマは、あらゆる生き物の保護であると言われます。ヴァイシャたちにとっては、祭式の完遂、賓客の歓待が (ダルマと言われます)。
- (7) バラモン・クシャトリヤ・ヴァイシャに対して従順であることがシュードラの行為です。家長のダルマは、蛇の王よ、あらゆる生き物の幸福を望むことです。
- (8) 常に食事を制限すること、順次誓約を実行することは (家長の) ダルマです。実に、もろもろの感官がダルマと結合することによって、ダルマはすぐれたものとなります<sup>88</sup>。
- (9) 「私は誰のものか、私はどこから来たのか、私は誰か、誰が私に属するのか」ということを目的とする思考をもつ人は、常にこのように解脱の生活期の者となるべきです<sup>89</sup>。
- (10) 夫に対する貞節は (pativratātvam)、妻にとって最高のダルマとされています。あなたの教えによって、蛇の王よ、私はそれを正しく知っています。
- (11) あなたがダルマを常としている時、そのようにダルマを知る私が、どうして正しい道を捨てて、間違った道を行くことがありますか<sup>90</sup>。

<sup>85</sup>P. pūrvam uktena vidhinā yuktā yuktena matsamam B. pūrvam uktena vidhinā yuktiyuktena tatsamam K. pūrvam uktena vidhinā yuktā karmasu vartase

<sup>86</sup>P. vedapāraṇam B.,K.: vedadhāraṇam

<sup>87</sup>P. rājñām B.,K.: rājño

<sup>88</sup>dharmo hi dharmasambandhād indriyāṇām viśeṣaṇam (B.,K.: viśeṣataḥ) この詩節に関して、Ganguli は脚注で次のように述べている。This verse seems to be unintelligible. I think the sense is this. Frugality of fare and observance of vows constitute merit for person of all classes. These imply the restraint of the senses, for if the senses be not restrained, no one can observe vows or practise frugality. There is a connection, thus between the duties of religion and the senses. (p.210, fn.1)

<sup>89</sup>P. mokṣāśramī bhavet B.,K.: mokṣāśrame vaset

<sup>90</sup>P. yāsyāmi viśame pathi B.,K.: yāsyāmi vipathaṃ pathaḥ

- (12) 大きな幸運をもつ方よ、神々に対するダルマの行為は損なわれていません。そして私は賓客たちの尊敬に怠りなく常に配慮しています。
- (13) ですが、バラモンがここにやって来てから今日で七日あるいは八日<sup>91</sup>になります。彼は、私に目的 (kārya) を言いません。ただあなたに会うのを願っています。
- (14) そのバラモンは、あなたに会うのを望んで、ヴェーダを繰り返しつつ<sup>92</sup>、誓約を守って、ゴーマティー川の砂州に座しています。
- (15) 蛇の王よ、私は彼によって、尊敬に基づいて<sup>93</sup>、頼まれています。かの最高の蛇が私の近くに来たならば、送り出すことを。
- (16) このことを聞いたならば、大英知の方よ、あなたはそこに行って下さい。そして (vā), 目を耳とする方よ<sup>94</sup>、彼に会って下さい。

[348 章] (B.360 章, C.13864-13883, K.370 章) (ナーガの伝えるバラモン (9) ナーガの妻によるナーガの説得)

ナーガは言った。

- (1) それではお前は、バラモンの姿によって、その人を何者と見たのかね。ただの人間のバラモンかね、あるいは神かね、明るく微笑む者よ。
- (2) 美しき者よ、私に会うのを願うことのできる人間は誰であろうか。また、(私に) 会うのを願って、命令するような言葉を語るのは誰であろうか。
- (3) 美しい者よ、神々とアスラの群の中で、そして神仙たちの中で、蛇たちは、大きな力を持ち、スラサーの子孫たちであり<sup>95</sup>、素早く動く者である。
- (4) 我々は、尊敬されるべき身であり、恩寵を与える者であり、また (神の) 従者でもある<sup>96</sup>。とりわけ人間たちにとっては、(我々は) 財産を見張る者であると伝えられている<sup>97</sup>。

ナーガの妻は言った。

<sup>91</sup>saptāṣṭadivāsās tv adya viprasyeḥāgatasya vai Cf.Hopkins[1903-2]: the nominative with a dependent genitive, "a week (since) the priest came hither, p.1.24; Oberlies[Grammar]: 10.3.1. Syntax of cases: Nominative, used to express statements of (a) time, "Seven [or] eight days [from] now – since a brahmin has come here", p.307.5. Ganguli は *saptāṣṭadivāsās* を十五日と解している。(p.211.11)

<sup>92</sup>P. āsīno "vartayan brahma B.,K.: āsīno vartayan brahma Cn. vartayan, āvartayan / brahma, vedam / (vartayan, すなわち, 繰り返しつつ, brahma, すなわち, ヴェーダを, という意味である) Sandhi irregular: āsīno "vartayan Cf.Oberlies[Grammar]: 1.2. Special cases of sandhi, 1.2.4. -o ' < /-as ā/, p.24.7, p.24, fn.2.

<sup>93</sup>P. sāmāpūrvaṃ B.,K.: satyapūrvaṃ  
<sup>94</sup>darśanaśravaḥ Ca. darśanaśrava iti tasyaiva nāgasya sambodhanam, cakuṣuḥśrava ity arthaḥ / (darśanaśravaḥとは、まさしくそのナーガの呼格である。目を耳としてもつ者よ, という意味である)

<sup>95</sup>P. sauraseyās B.,K.: saurabheyās Cf.Sørensen[Index]: *surasā*<sup>1</sup>, the mother of the serpents, p.661b.

<sup>96</sup>anuyāyinaḥ Ganguli: The meaning of *anuyāyinaḥ* is that we should be followed by others, i.e., we deserve to walk at the head of others, p.211, fn.2. Deussen: Schleichenden, p.874, v.4.

<sup>97</sup>P. dhanādhyakṣā iti śrutiḥ B.,K.: nāvekṣyā iti me matiḥ

- (5) 正直なところ私は、これは神ではないと考えます<sup>98</sup>、風を食べる方よ。ですが、この者について一つのことはわかります。この者は、信愛をもち、怒りを超えています<sup>99</sup>。
- (6) 彼は、チャータカ鳥が水を望むように、ある事を切望しています。雨を好むその鳥が雨を望むかのように、あなたに会うのを望んでいるのです。
- (7) (バラモンに会わなければ)いかなる神も怒って、あなたを守ることはないでしょう<sup>100</sup>。(あなたと)同じ家柄に生まれた者で<sup>101</sup>(会わずに)座っている者は誰もいないでしょう。
- (8) その生まれつきの怒りを捨てて、あなたは彼に会って下さい。今日彼の望みを断つことによって、自分自身を苦しめるべきではありません。
- (9) 期待をもって保護を求める人々の涙をぬぐうことをしなければ、王であれ王の息子であれ、胎児殺しとされるでしょう<sup>102</sup>。
- (10) 沈黙によって知識という果報が獲得され、布施によって大きな名声が(獲得されます)。真実語による雄弁さは、他界でも称賛されます。
- (11) (人は)土地を与えることによって、生活期(の完了)に等しい(āśramasammitām)状態を得ます。失った財産を<sup>103</sup>獲得すれば、(それに相応する)果報を得るでしょう。
- (12) 自ら望んで清浄な無欲の行為を為すならば、誰も地獄には行かない、とダルマを知る人々は知っています。

ナーガは言った。

- (13) 確かに生来の欠点である自惚れ(abhimāna)のために、私には大きな高慢さ(māna)がある<sup>104</sup>。利己的動機から生じた怒りは、お前の言葉の火によって焼かれました、よき女よ。
- (14) そして私は、よき女よ、怒りよりも大きな暗闇はないと考えねばならない。その怒りのためにとりわけ蛇たちは非難されるのだ。
- (15) なぜならば、(怒りという)欠点に支配されて、強大な十の首を持つ者(ラーヴァナ)は、インドラの敵として、戦闘においてラーマによって殺されたのだ。

<sup>98</sup>P. ārjavenābhijānāmi B.,K.: ārjavena vijānāmi

<sup>99</sup>P. atiroṣaṇaḥ B.,K.: atiroṣaṇa (vocative)

<sup>100</sup>P. na hi tvā daivatam kiṃcid vivignaṃ pratipālayet B.,K.: hitvā tvaddarśanam kiṃcid vighnam na pratipālayet Cn. tvaddarśanam hitvā, vinā, ko 'pi vighno mā bhūd ity arthaḥ / (tvaddarśanam あなたに会うこと, hitvā, すなわち, なしに, いかなる障害もあってはならない, という意味である) Cp. tvaddarśanam prati kiṃcid vighnam, kiṃcit pratibandhakam, tam brāhmaṇam [na] pratipālayeta / (tvaddarśanam あなたに会うことに, 関して, kiṃcid vighnam, すなわち, 何らかの妨げとなるものは, そのバラモンを守ることはないであろう, という意味である)

<sup>101</sup>P. tulye hy abhijane jāto B.,K.: tulyo 'py abhijane jāto Cn. anyo nāgo 'pi kaścin na paryuāsate, parityajya na āste / atithim tyaktvā na kaścit svakule āste ity arthaḥ / (他の蛇でさえも, kaścin na paryuāsate, すなわち, 捨てて, 座ってはいないであろう。すなわち, 賓客を捨てて, 自分の家にいる者は誰もいない, という意味である)

<sup>102</sup>bhrūṇahatyaiiva yujyate Cn.p.: bhrūṇahatyaiiva, bhrūṇahatyaiiva / (bhrūṇahatyaiiva は, bhrūṇahatyayā (bhrūṇahatyā の具格単数) という読みもある)

<sup>103</sup>P. naṣṭasyārthasya B.,K.: nyāyyasyārthasya

<sup>104</sup>P. abhimānena māno me B.,K.: abhimānair na māno me

- (16) ラーマによって宮中にいた牛が奪われたと聞いて、攻撃心から怒りに奮いたったカールタヴィールヤの息子たちは(ラーマによって)殺された。
- (17) 千眼の者インドラに匹敵する大力のカールタヴィールヤは、怒りのために、ジャマドアグニの子ラーマによって戦闘において殺された。
- (18) このように怒りは、もろもろの苦行の敵であり<sup>105</sup>、幸福の破壊者だ。私は、お前の言葉を聞いて、怒りを抑え込んだ。
- (19) 私はとりわけ、移ろわぬ者よ、お前というあらゆる徳性を備えた妻がいる私自身を讃えましょう、大きな眼をもつ者よ。
- (20) それではこの私は、その再生族がいるところに行きましょう。彼がすべてにわたって言葉を述べたならば、目的を達成せずに去るということはないでしょう<sup>106</sup>。

[349章] (B.361章, C.13884-13899, K.371章) (ナラダの伝えるバラモン(10) ナーガとバラモンの出会い)

ビーシュマは言った。

- (1) そこで、その蛇の王は、バラモンのことを心に思い、用件について (kāryavattām) 考えながら、バラモンのところへ向かった。
- (2) 人々の支配者よ、その思慮深い、生来ダルマを好む蛇の王は、彼に近づいて、(次のような) 穏やかな言葉を発した。
- (3) 「おお、どうかご寛容を。あなたとお話ししましょう。怒ってはなりません。あなたがここにやって来たのは、何を求めてですか、目的は何ですか。
- (4) (あなたの) 目の前に近づき、愛情によってあなたにお尋ねします、再生族よ。寂しいゴーマティー川の岸で、一体あなたは何を<sup>107</sup> 敬っているのですか。」

バラモンは言った。

- (5) 私をダルマラーニヤとお知り下さい。すぐれた再生族である<sup>108</sup> ナーガ・パドマナーバに会うためにここにやって来ました。ここに私の目的 (kārya) があります。
- (6) しかし私は彼に近づいてはいません<sup>109</sup>。彼は外出したと聞きました。私は、農夫が雨雲を期待するかのごとくに、その親族の者に会うのを期待しています<sup>110</sup>。

<sup>105</sup>tad eṣa tapasām śatruḥ Cf. 原 [1975]: 忿怒は tapas の敵, p.513.19.

<sup>106</sup>P. nāktārthaḥ prayāsyati B.,K.: sa kṛtārthaḥ prayāsyati

<sup>107</sup>P. kiṃ B.,K.: kaṃ

<sup>108</sup>P. dvijaśreṣṭham B.,K.: dvijaśreṣṭha Ca. dvijaśreṣṭham, nāgam evātra / (dvijaśreṣṭham とは、ここでは、ナーガに、という意味である) N. dvijānām aṇḍajānām sarpāṇām śreṣṭha / (dvijānām すなわち、卵生の者たちの中の、すなわち、蛇たちの中の、śreṣṭha すぐれた者よ、という意味である。)

<sup>109</sup>P. aham asāṃnidhyam B.,K.: aham asāṃnidhye

<sup>110</sup>P. svajanam taṃ pratikṣāmi B.,K.: svajanāt taṃ pratikṣāmi B.,K. の方が、「親族から聞いた」となって、わかりやすい。P. では、ナーガ自身が svajanam と言われていることになる。

- (7) 私は、彼の汚れを取り除き<sup>111</sup>、彼の幸福を念じて繰り返しヴェーダを詠んでいます<sup>112</sup>。(彼に会うまでは) ヨーガに専念して、愁いなく過ごします。

ナーガは言った。

- (8) おお、有徳の方よ、あなたは慈愛を行う方です。よき人を愛する方です。あなたは多聞の方です<sup>113</sup>、大幸運の方よ。あなたは愛情をもって他の者を見えています。
- (9) 私が、あなたが探しているナーガです、梵仙よ。何なりとお申し付け下さい。あなたにとって嬉しいことは何でもいたします。
- (10) 私は、親族の者よりあなたがここに到着したのを聞きました。それゆえ、私はあなたに会うために自らやって来たのです、バラモンよ。
- (11) ここにやって来たあなたは、今日目的を果たして帰るでしょう。あなたは、私を信じて、私を事にあたらせて下さい、バラモンの最上者よ。
- (12) 私達は皆完全にあなたによって(あなたの)徳を通して買われたのです<sup>114</sup>。あなたは自分の利益を捨てて、ここで私だけに専心したのですから(anurudhyase)。

バラモンは言った。

- (13) 大きな幸運をもつ方よ、私はあなたに会うのを切望してやってきました。目的を知らない私は、目的についていくらかお尋ねしたいのです、蛇よ。
- (14) 私は、自分に立脚して、自分の幸福を、すなわち(最高の)アートマンを求めつつも、大英知の方よ<sup>115</sup>、(その一方で)衣服を求め、(世間的な)有力者になっています<sup>116</sup>。
- (15) あなたは、名誉に満ちた光線を発し、月光に触れるかのごとく心地よき<sup>117</sup>、アートマンによって輝く、もろもろの自身の徳によって<sup>118</sup>輝いています。
- (16) そのようなあなたは、私に起こった疑問を断って下さい、風を食べる方よ。これから先、私は用件を(kāryam)話すでしょう。あなたは私の言うことをお聞き下さい。

[350章] (B.362章, C.13900-13917, K.372章) (ナーラダの伝えるバラモン(11)太陽神に関する不思議な出来事)

バラモンは言った。

<sup>111</sup>akleśakaraṇam Cn. akleśakaraṇam, kleśanivāraṇam / (akleśakaraṇam とは、汚れを防ぐものである、という意味である)  
<sup>112</sup>P. vartayāmy ayutaṃ brahma B.,K.: āvartayāmi tad brahma Cp.s: brahma, vedam / (brahma とは、ヴェーダを、という意味である)  
<sup>113</sup>P. śrāvādyas tvam B.,K.: avācyas tvam  
<sup>114</sup>vayaṃ hi bhavatā sarve guṇakṛitā viśeṣataḥ / Ganguli: A form of expression meaning that 'we are your slaves', p.214, fn.1.  
<sup>115</sup>P. mahāprājña B.,K.: mahāprajñam  
<sup>116</sup>P. balavantam upāsmi ha B.,K.: calacittam upāsmi ha  
<sup>117</sup>śaśāṅkakarasaṃsparśair hr̥dyair Cs. śaśāṅkakarasaṃsparśaiḥ, śaśāṅkakiraṇavat sukhakaraiḥ / (śaśāṅkarasaṃsparśaiḥとは、月の光のように、喜びを与える、という意味である)  
<sup>118</sup>P. svaguṇair B. saguṇair K. sa guṇair



- (1) あなたは、順番によって、太陽神の一輪車を引きに行きます。もしそこであなたが何か不思議なものを見たのであれば、あなたは(それを)お話してください。(韻律: Upajāti)

ナーガは言った<sup>119</sup>。

- (2) 太陽には、鳥たちが木の枝々にとまるかのごとく、その千の光線を抛り所として、完成した聖者たちが神々と共に住んでいます。
- (3) それ(太陽)から大きな風神が発し、太陽の光線に依存して空中に広がります。バラモンよ、これより不思議なことが何かあるでしょうか<sup>120</sup>。
- (4) 太陽の、シュクラ(輝き)という名の暗い足(=光線)は<sup>121</sup>、空中に(雲として)水を保ち、雨期のたびに水を放出します。これより不思議なことが何かあるでしょうか。
- (5) それ(太陽)は、八ヶ月間清浄な光によって放出された水を、時がたつと、再び取っていきます。これより不思議なことが何かあるでしょうか。
- (6) その(太陽の)特別な光たちの中に、アートマンは常に存在しています。それ(アートマン)によって、この大地と、動くものと動かぬものの<sup>122</sup>種子が保持されるのです。
- (7) そこ(アートマン)には、大きな腕をもつ永遠の、最高の、不滅の<sup>123</sup>、無始無終の神がいます。バラモンよ、これより不思議なことが何かあるでしょうか。
- (8) もろもろの不思議の中の不思議と言うべき(iva)一つのことをお聞き下さい。それを私は、太陽の近くにいたので、澄んだ虚空に見ました。
- (9) かつて、正午に太陽がもろもろの世界を照らした時、太陽に対抗するがごときものが<sup>124</sup>、あらゆるところから見られました。

<sup>119</sup>B.,K. はこの後に次の2行を挿入している。(=MBh.XII.914\*)

āścaryāṇām anekānām pratiṣṭhā bhagavān raviḥ /  
(至尊の太陽は、多くの不思議なものの基盤です。)

yato bhūtāḥ pravartante sarve trailokyasaṃmatāḥ /  
(太陽から、三界で尊敬されるあらゆる生き物は生じるのです。)

<sup>120</sup>P. vipra kim āścaryataram tataḥ B.,K.: tatra kim āścaryam ataḥ param

B.,K. はこの後に次の4行を挿入している。(=MBh.XII.915\*)

vibhajya taṃ tu vipraṣe prajānām hitakāmyayā /  
toyaṃ sṛjati varṣāsu kim āścaryam ataḥ param /

(生き物たちの幸福のために、梵仙よ、(太陽な)それを分割して、雨期のたびに水を放出します。これより不思議なことが何かあるでしょうか。)

yasya maṇḍalamadhyastho mahātmā paramatviṣā /  
dīptaḥ samīkṣate lokān kim āścaryam ataḥ param /

(その(太陽の)円盤の中央にいる大きなアートマンは、最高の輝きによって輝き、もろもろの世界を見渡すのです。これより不思議なことが何かあるでしょうか。)

<sup>121</sup>P. asitaḥ pādo yasya B.,K.: asitaḥ pādo yaś ca

<sup>122</sup>P.,K.: sacarācaram B. sacarācarā

<sup>123</sup>P. paramo 'kṣarah B.,K.: puruṣottamaḥ

<sup>124</sup>pratyādityapratikāśaḥ Ca. pratyādityapratikāśaḥ, ādityāntaratulyatejaskaḥ / (pratyādityapratikāśaḥとは、もう一つの太陽に等しい光をもつものが、という意味である) Cp. pratyādityapratikāśam, pratyānmukhāḥ, ādityābhimukhāḥ / (pratyādityapratikāśam 太陽に対抗するがごときものを、顔を西に向けた者たちが(?), すなわち、太陽に顔を向けた者たちが(見た)、という意味である) Cs. dviṭyābhāskara iva prakāśamānaḥ / (第二の太陽のごとく輝くものが、という意味である)

- (10) それは、自らの光によってもろもろの世界すべてを照らしつつ、天空を引き裂くかのように、太陽に向かって進みました。
- (11) 供物を捧げられた(火の)ごとく、その光はもろもろの光の炎によって(世界を)満たし、言葉で表現できない美しさのために、それはあたかも第二の太陽のごとくでありました。
- (12) それが(太陽に)到着すると、太陽神は手をさし伸べました<sup>125</sup>。その者も、挨拶を返そうとして右手を差し出しました。
- (13) それからそれは天空を引き裂いて、光の円盤に入りました。(太陽と)一つになったその光は、その瞬間、太陽そのものになりました<sup>126</sup>。
- (14) 両者の光が合一した時、私たちには疑問が生じました。この両者のうちどちらが太陽神なのか。車に乗っている者か、このやって来た者か。
- (15) 疑問の生じた私たちは、太陽神に尋ねました。「天空を昇って、第二の太陽のごとくになったこの者は誰ですか」

[351章] (B.363章, C.13918-13924, K.373章) (ナーラダの伝えるバラモン (12) 落ち穂拾いの誓約)

太陽神は言った。

- (1) これは火神ではない。アスラではない。蛇神でもない。これは、落ち穂拾いの誓約 (unchavṛttivrata) において完成して、天に昇った聖者である。
- (2) これは、木の根と果実を食物とし、枯葉を食べ、水を飲み、風を食べ、心を集中していたバラモンである。
- (3) このバラモンによって、讃歌のもろもろの集成が心中で讃えられた<sup>127</sup>。この者によって天の門のための努力が為され<sup>128</sup>、この者は第三天に (tridivam) 達したのである。
- (4) このバラモンは、萎れない英知をもち、願望なく、常に落穂を食物として<sup>129</sup>、あらゆる生き物の幸福のために専心したのである、蛇よ。(Cf.MBh.XII.353.8)
- (5) 神々もガンダルヴァたちもアスラたちも蛇たちも、この世で最高の道に到達した者たちに (bhūtānām) 優ることはない。

<sup>125</sup>P. hasto datto vivasvatā B.,K.: hastau dattau vivasvatā

<sup>126</sup>kṣaṇenādityatām gatam Cp. kṣaṇenādityatām gatam, kramamukṣiṃ yātam ity arthaḥ / (kṣaṇenādityatām gatam とは、漸次の解脱に達した、という意味である)

<sup>127</sup>P. ṛcaś cānena vipreṇa saṃhitāntar abhiṣṭutāḥ B.,K.: bhavaś cānena vipreṇa saṃhitābhir abhiṣṭutāḥ Cs. antar abhiṣṭutāḥ, manasā japtāḥ / (antar abhiṣṭutāḥ とは、心で低誦された、という意味である) P. は、9 音節になってしまうが、saṃhitā antar abhiṣṭutāḥ と読むべきであろう。 Cf. Oberlies[Grammar]: 1.8. Double sandhi, 1.8.7. -ā- < /-ās a-/ , p.40.14.

<sup>128</sup>P. svargadvāraḥkṛtodyogo yena B.,K.: svargadvāre kṛtodyogo yena

<sup>129</sup>uñchaśilāśanaḥ Cs. uñchaśilāśanaḥ, kṣetrād vṛihyādiṣu svāmibhir apakṛteṣu lūneṣu satsu, daiṃvāt patitām mañjarīm ādāya utpatanti pakṣiṇaḥ / te yatra vṛkṣādaḥ mañjarīm niksīpya sthāpayitvā tadgatān kaṇān bhakṣayanti tatra patitadhānyena yātrāmātraśilāḥ sa uñchaśilāśanaḥ / (uñchaśilāśanaḥ とは、田んぼから米粒などが所有者たちによって取られ、収穫されてしまった時、鳥たちは、たまたま落ちた花の蕾を取って飛び上がる。鳥たちは、木などに花の蕾を投げつけて、固定して、その中にあるいくつかの種を食べるのだが、その時落ちた種の粒を、唯一の糧とするのを常とする者が、uñchaśilāśanaḥ 落穂を食物とする者である)

ナーガは言った。

- (6) 私はこのような不思議なことをそこで見ました，再生族よ。完成した人間の身体は<sup>130</sup>，完成した状態に達して，太陽と一体となって大地を廻るのです，バラモンよ。

[352 章] (B.364 章, C.13925-13934, K.374 章) (ナーラダの伝えるバラモン (13) バラモンの感謝と確信)  
バラモンは言った。

- (1) 不思議なことです。ここに疑問はありません。蛇神よ，私は大変満足しました。明晰さをそなえたもろもろの言葉によって，私は道を指し示されました。
- (2) あなたに健康あれかし。私は出発します，よき人よ，最高の蛇神よ。あなたは，(召使いを私のところに) 派遣することをお命じになって，私を思い出して下さい。

ナーガは言った。

- (3) 私のところに来た用件も言わずに，あなたは今どこに向かうのですか。あなたが今ここにやってきた用件と目的を言って下さい，バラモンよ。
- (4) 言葉にされてもされなくとも，用件が為されたのであれば，私に暇を告げ，バラモンの雄牛よ，私が同意したならば，それからあなたは行くべきです，バラモンよ。
- (5) あなたはこの地に親愛の念をもっているのに，私に会っただけで，捨てて，去るべきではありません，梵仙よ。あたかも木の根元まで行った (のに実をとらずに去る) 人のように。
- (6) すぐれた再生族よ，私はあなたの中におり<sup>131</sup>，あなたは私の中にいます。このことに疑いはありません。この世界の人々はすべてあなたのものです<sup>132</sup>。あなたは私に何を気遣うことがありましようか，汚れなき人よ。

バラモンは言った。

- (7) そのとおりです，大英知の者よ，目的を知る者よ<sup>133</sup>，蛇神よ。神々は，実際あらゆる点であなたを超えていません。
- (8) 私であるものは，あなたに他なりません。このとおりです，蛇神よ<sup>134</sup>。私もあなたも生き物たちもすべて，常に偏在しているのです<sup>135</sup>。

<sup>130</sup>P. saṃsiddho mānuṣaḥ kāyo B.,K.: saṃsiddho mānuṣaḥ kāmaṃ

<sup>131</sup>tvayi cāhaṃ Cn. tvayi cāhaṃ, bhaktimān iti śeṣaḥ / (tvayi cāhaṃ は，(私はあなたに) 信頼をおいている，と補われるべきである)

<sup>132</sup>loko 'yaṃ bhavataḥ sarvaḥ Ganguli: All the persons in this city are thine, p.216.32. Deussen: alle meine Leute gehören dir an, p.881, v.6. 中村 [2000]: この世界の人々は皆，あなたの [友人] です。(p.1075, v.6)

<sup>133</sup>P. vijñātārtha B.,K.: viditātman

<sup>134</sup>P. ya evāhaṃ sa eva tvam evam etad bhujāṅgama / B.,K.: sa eva tvam sa evāhaṃ yo 'haṃ sa tu bhavān api / (あなたは彼であり，私は彼です。私であるものはあなたでもあります) Cn. tuśabdo 'vadhāraṇe / etena bhedābhedapakṣo nirastaḥ / (tu の語は強調のためである。これによって (神と世界の) 相違と同一性を同時に認める立場が否定されている)

<sup>135</sup>P. sarvatragāḥ B.,K.: yatra gatāḥ

- (9) しかし、蛇の王よ、私には、善行の蓄積について疑問がありました。しかし私は今や、よき人よ、目的を示すものである<sup>136</sup> 落穂拾いの誓約を実行するでしょう。
- (10) これが私の確信です、よき人よ。十分な理由をもって得た確信です<sup>137</sup>。私は(今や)暇乞いをいたします。あなたに幸いあることを。蛇神よ、私は目的を達しました。

[353章] (B.365章, C.13935-13943, K.375章) (ナーラダの伝えるバラモン (14) 落穂拾い説話の相承) ビーシュマは言った。

- (1) 確信をもったバラモンは、最もすぐれた蛇に別れを告げて、浄身 (dīkṣā) を望んで、王よ、ブリグの子チュヤヴァナのところへ行った。
- (2) そこで彼は身を清め、ダルマのみを尊崇した。そしてその時、この話を語ったのである、王よ<sup>138</sup>。
- (3) ブリグの子(チュヤヴァナ)によってもこのよき話は、ジャナカ王の住いで、偉大なナーラダに対して語られたのである、諸王の王よ。
- (4) (インドラによって) 尋ねられたので、諸王の王よ、汚れなき行為をもつナーラダによっても、神々の王インドラの住居で(この話は) 語られたのである、すぐれたパーラタ族よ。
- (5) 神々の王インドラによっても、かつてこのよき話は、称賛すべきすべてのヴァスたちに対して<sup>139</sup> 語られたのである、大地の王よ。
- (6) 私がラーマとの恐ろしい戦いにあった時、その時、ヴァスたちによって、王よ、この話は私に語られたのである。
- (7) あなたが尋ねるので、私は、人々の王よ<sup>140</sup>、この清らかにしてダルマにかなった話をそなた(ユディシュティラ)に正しく語ったのである、ダルマの保持者たちの中で最もすぐれた者よ。
- (8) そなたが私に尋ねたのは、この最高のダルマである、パーラタ族よ。ダルマの目的の実践において願望なき者は、萎れない英知をもつ者である<sup>141</sup>、王よ。(Cf.MBh.XII.351.4)
- (9) そして、彼の最高のバラモンは、確信をもって<sup>142</sup>、蛇の王に教えられた目的を行うべく<sup>143</sup>、禁戒と勸戒に専心し、落穂を食物とすることを意図して、森の奥に<sup>144</sup> 入ったのである。(韻律: Puṣpitaḡrā<sup>145</sup>)

(終)

<sup>136</sup>P. arthadarśanam B.,K.: arthasādhanam

<sup>137</sup>P. kṛtaḡ kārāṇavattaraḡ B.,K.: kṛtaḡ kārāṇam uttamam

<sup>138</sup>tathaiva ca kathām etām rājan kathitavāms tadā Cf.Hopkins[Great Epic]: a philosophical discourse of religious content, *mokṣadharmā*, is an Itihāsa, xii.334, 42 (=P.320.41); and the tale of a good Brahman is a kathā on duty, xii.354ff. (=P.342ff.), p.51, fn.1.

<sup>139</sup>P. vasubhyo B.,K.: viprebhyo

<sup>140</sup>P. tubhyaḡ viśāḡ pate B.,K.: caivottamā tava

<sup>141</sup>P. asannadhīr anākāṅkṣī B.,K.: āsīd dhīro hy anākāṅkṣī (*hy*, a hiatus breaker)

<sup>142</sup>P. sa ca kila kṛtānīscayo dvijāḡryō B.,K.: sa ca kila kṛtānīscati dvijo a 句は、P. は 12 音節、B.,K. は 11 音節。

<sup>143</sup>P. bhujagapatipratideśītārthakṛtyaḡ B.,K.: -ātmakṛtyaḡ

<sup>144</sup>P. yamaniyamasamāhito vanāntaḡ B.,K.: yamaniyamasaho vanāntaraḡ c 句は、P. は 12 音節、B.,K. は 11 音節。

<sup>145</sup>Hopkins[Great Epic] は、B. の読みの分析によって、この詩節を、a,c 句の音節数の不足する、14+18+14+18 韻脚からなる Mātrāchandas と指摘している。(p.347.7)

(2019年 1月 4日 受付)

(2019年 3月 19日 受理)